

# 日本都市社会学会ニュース

NO. 132 (2025. 11. 28)

※ 事務局が移転しました

事務局：〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1丁目1-1

広島修道大学人文学部社会学科 伊藤泰郎研究室内

e-mail: urbansociojp@gmail.com TEL: 082-830-1956 (直通)

(振替口座: 00140-4-703976) URL: <https://urbansocio.smoosy.atlas.jp/ja>

## 会長就任にあたって

高木恒一（立教大学）

2025年9月10日の日本都市社会学会第43回大会総会で会長に選出されました。思いもよらず選出されてしまい、戸惑っているというのが正直なところです。それでも皆様からいただいた期待を真摯に受け止めて、微力を尽くしていく所存です。

ここ数年の学会運営は、コロナの問題などの困難に対応しつつ、財政健全化や事務局体制の改善などへの取り組みが着実に進んできたと感じています。浅川達人前会長をはじめ、これまでの会長・理事・委員の皆様にご尽力いただいたことに深く感謝申し上げます。

さて、近年の動向として注目しているのは多様化の進展です。学会報告のテーマや方法の多様化とともに、会員の世代、ジェンダー、エスニシティなどの多様化もまた進展しています。これは好ましい状況ですが、これに伴い、会員間の関係にハラスメントや不快な状況が生じていないか注視する必要があります。ハラスメントや人権侵害に該当するような事案を未然に防ぐとともに、日常的な学会活動のなかで多様な会員がそれぞれを尊重し、活発な議論ができる環境づくりを考えていきたいと思います。

会員のみなさまにおかれましては、引き続きご協力いただきますよう、どうぞよろしくお願いたします。

## 第43回大会の報告

金汝卿（北九州市立大学）

第43回日本都市社会学会大会は、2025年9月10日・11日の両日、椋山女学園大学・星が丘キャンパスにて開催された。参加者は92名（会員81名、非会員11名）にのぼり、盛会となった。

残暑の厳しい中ではあったが、快晴に恵まれた初日を迎えた。自由報告部会では4件の報告が行われた。テーマ部会では「オールドカマー研究とニューカマー研究の接続とは何か」をテーマに、広島と大阪の事例をもとにした2件の報告と、それに対する2名のコメントがあり、構造的課題や両者の接点をめぐって活発な議論が展開された。昼食時のラウンドテーブルでは「『モノ』から都市を考える」をテーマに、司会2名と話題提供者4名が登壇し、多角的な視点から都市研究の新たな可能性が語られた。午後には自由報告4件とともに日韓合同セッションが行われ、「多文化都市における分断」をテーマに4件の報告がなされた。外国人労働者や外国人住民に関する研究が発表され、両国の視点から移民を比較する有意義な機会となった。引き続き開催された総会では、林真人会員への日本都市社会学会賞（磯村記念賞）授与に加え、諸議案の審議と次期役員選挙が行われた。その後の茶話会では、研究者間の交流が一層深まった。

2日目は、全国的な大雨予報にもかかわらず、多くの参加者が足を運んだ。午前には9件の自由報告が行われ、午後のシンポジウム「危機の時代における都市——食から見えてくる展望」では、都市空間における「食」と都市社会との関係について深い報告と討論が展開された。食を中心とした都市空間とネットワーク、生き方などに着目した3件の報告と2名のコメントにより、食と都市社会を考える新たな視点が開かれた。

残暑の厳しい気候に負けないほど熱のこもった報告が続き、第43回大会は盛会裡に幕を閉じ、新役員体制のもとでの次回大会の開催へとつながるものとなった。

## 第43回大会ラウンドテーブル「『モノ』から都市を考える」についての報告

大会初日、9月10日(水)12時00分～13時20分にラウンドテーブル「『モノ』から都市を考える」を開催し、約40名の参加があった。都市社会学における「モノ」の扱いは古くて新しい課題であり、その分析方針は多様である。今回のラウンドテーブルでは、各発表者がそれぞれの研究対象に即していかにか分析方針を立て、どのような試行錯誤を経たのかについて意見交換を行った。

フロアとの議論も交え、モノに関するデータの収集方法、工学・自然科学の知見の活用と社会学的方法論との接合、ヒトとモノや動物との関係の捉え方、人間中心主義的視点の再考、さらに都市の空間的・時間的スケールを再検討したうえで「都市」をいかに捉え直すか、といった論点が活発に議論された。物質性をめぐる問題は多岐にわたり、学際的な展開の可能性も示唆されたことから、今後も継続的に議論を重ねていく機会を設けたい。

最後に、ご登壇くださった発表者の皆さま、また活発にご意見を寄せてくださった参加者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

(企画担当委員 伊藤泰郎・仙波希望・中川雄大・仁井田典子)

### 都市災害におけるヒトーモノ連関—インフラ論からの分析指針

岩館豊(文京学院大学)

今回の話題提供では、東日本大震災を契機として始めた、災害下・東京の水道危機分析における筆者の「紆余曲折」をもとに、「モノから都市を考える」ための実際的な工夫や困難について報告を行なった。

筆者がこれまで行なった工夫(と思われるもの)は、第一に、ヒトーモノの連関を、具体性の水準を把持しながら分析するために、ヒトやモノが絡み合う「出来事」という単位を採用し、出来事のクロノジカルなリストである「東日本大震災・東京水道クロニクル 2011.3.11-5.11」というデータセットを製作したことである。第二に、上記のデータセットをもとに、出来事のテキストデータ上に見出されるヒトやモノを抽出し、二次元平面上にマッピングすることで、災害において水道というインフラが不安定化し、再安定化していく過程の一端を記述した。その際、ラトゥールやカロンによる「translation」あるいは「translationの連鎖」という概念を参照した。

困難を挙げるときりがないが、筆者自身の作業においては、東日本大震災のインパクトの大きさや、結局ヒトの動きの方に引っ張られるあまり、研究遂行上必要な認識論的な切断が十分にできていないことが挙げられる。また、モノをめぐる社会理論を、経験的な都市災害分析へと実装していくための概念=理論的ツールが手元に乏しかったことも困難と言えるかもしれない。フロアからは、多くのコメントや質問をいただいた。丹念にデータを集めていくことの意義をあらためて感じ、筆者としてはビジュアルリサーチに一つの可能性を見出したい。最後に、もっともっと議論したいと感じさせる、ワクワクする時間・空間を用意してくださった企画委員はじめ学会の皆様に、心から感謝申し上げます。

### ごみ集積所をめぐる町内会・自治会とごみの変遷—浜松市の事例

鈴木颯太(東京都立大学大学院)

報告者は、1950年代から70年代にかけての静岡県浜松市のごみの搬出方法の変遷を確認する作業を通し、ごみ集積所の確立、および、地域住民や自治会によるそれらの維持管理体制の成立プロセスを紹介した。とりわけ本報告では、非人間(ごみ、紙袋、野犬、風雨など)をも射程に入れることで、この成立プロセスを「人間と非人間が相互に連関していく過程」として捉えた。

まず、1950年代における浜松市のごみ収集は戸別収集だった。各家庭の軒先にはコンクリート製のごみ箱が備え付けられており、収集作業員はそこからごみを掻き出し、作業にあっていた。やがて、60年代に入るとポリエチレン容器がごみ箱として登場し、作業員は容器ごと持ち上げて収集することができるようになった。さらに1965年になると、市内の地区自治会連合会の会長により、紙製のごみ収集袋が発案され、ごみ収集に採用されるようになった。これにより収集効率が上昇したものの、紙袋にまとめられたことで野犬や風によって軒先が散らかる懸念も生じた。しかし同時に、紙袋に入れられたことでごみの移動も容易になったため、次第にごみは一か所に集められ、ごみ集積所が徐々に確立していった。

このごみ集積所の管理を地域住民や自治会が引き受けていった。このように、ごみ集積所の管理体制は、その確立当初より、人間／非人間を問わない多様なアクターによって形作られてきた。

その上で当日のディスカッションでは、モノもまたデータとして捉えていくべきという趣旨のご意見を頂戴した。着眼点にとどまらず、データとして非人間を見ていくことで、これらの記述をさらに分厚いものにできるかもしれない。

このたびは、他の登壇者の方による示唆に富むご報告と、参加者の方による貴重なご意見から、多くの学びを得ることができました。このような貴重な機会を設けてくださった企画委員の先生方、当日ご出席いただいたすべての方に、厚くお礼申し上げます。

## 文化から立ち上げる「モノ」たちの都市—マテリアル、アーキテクチャ、そして地域へ

関駿平 (近畿大学)

発表者から話題提供を行ったのが、ドイツ系建築社会学の知見と、自身が行なってきたオーセンティックバーの事例研究である。人の実践を契機として、(相対的に) 可動性のある物質が、建築の中で動く。その軌道やプロセスを観察することで「モノ」と実践を組み立てる人々の実践が見えてくる。このようなドイツ系の建築社会学の知見は、バーカウンターをめぐるモノを移動させることで「美しさ」を達成させるバーテンダーの実践に言葉を与える。また、その実践は時に、一定の建築を飛び越え「地域」にまで波及することもある。発表者は、こうした事例の紹介を踏まえて、建築社会学と都市社会学の架橋の可能性を話題提供した。

この話題提供に際して、ラウンドテーブル上で行われた議論は 2 点にまとめることができる。まずシンプルに、モノをめぐる議論は都市社会学における「認識」の拡張をもたらすという議論である。多くの論者が指摘するように、都市社会学における非人間アクターへの拡張は、まずもって「反省」から始めなければならない。

また 2 点目に、このような認識論は社会調査の方法とも紐づけるべきであるという議論である。言うまでもなく、社会調査の認識論は実際の調査のアプローチというデータ収集の問題と無関係ではない。調査の方法によっては、モノをめぐる現象の特質 (例えば時間軸など) が異なるデータが収集される。これらの差異に自覚的に調査に取り組むことの必要性が強調された。

これらの議論は、ラウンドテーブルの時間いっぱいまで行われ、豊かな議論の場となった。改めて議論に参加いただいた皆さまに感謝申し上げたい。

## 都市における生物をいかにとらえていくべきか?—日本の社会学とマルチスピーシーズ研究の系譜から

辻井敦大 (甲南大学・非会員)

報告者は、日本の社会学と英語圏のマルチスピーシーズ研究の系譜を検討し、都市における生物を社会的にとらえることについての話題を提供した。

古典的な社会学の研究では、人間中心主義的な前提や都市の社会秩序への関心から、生物をほとんど扱ってこなかった。しかし近年、COVID-19 の影響やポストヒューマニズム思想の展開やアクターネットワーク理論を背景に、生物のエージェンシーに注目する動きが広がっている。なかでも、英語圏ではマルチスピーシーズ研究の延長線上に、動物地理学や「人獣共通感染症の都市化」の議論などが都市研究の枠組みに生物を位置づけてきた。一方、日本の社会学では、環境社会学を中心に、環境倫理学との連携を通じて、生活環境主義や社会的リンク論の視座のもと、人間と生物の関係を農山村において実証的に探究してきた。両者は、系譜や出発点こそ異なるが、ローカルな場での生物と人間の絡み合いに注目し、精緻に描き出すという点で補完し合いうる可能性がある。このように、社会学として都市における生物のエージェンシーを描き出すにあたっては、両者の系譜を検討したうえで、それぞれの事例や方法ごとに研究を位置づけていく必要があると考えられる。

ディスカッションの時間では、モノや生物への研究の展開やそうした周辺化されてきた対象をいかに調査し、データ化していくことが可能なかが議論され、重要なご意見を賜った。生物という周辺化された対象を考えるうえでの貴重な機会を設け、ご招待をいただいた関係者の皆さま、そしてご参加いただいた方々に厚くお礼申し上げます。

## 総会記録

総会は、大会1日目の9月10日（水）、下記の次第にそって、椋山女学園大学・星が丘キャンパスにおいて行われました。

1. 開会の辞（高木恒一常任理事）
2. 会長あいさつ（浅川達人会長）
3. 開催校あいさつ（黒田由彦会員・椋山女学園大学学長）
4. 座長推挙（小山雄一郎会員を選出）
5. 報告事項

### (1) 理事会報告

三田泰雅事務局担当理事より、2024～25年度の理事会の審議内容のほか、会勢及び会費納入率について報告がありました。

### (2) 企画委員会報告

二階堂裕子企画委員長より、2024～2025年度の企画委員会についての活動報告がありました。また、今年度の委員会の活動として、二重発表の取り扱いについての取り決め案が作成されたことについての報告がありました。今年度の大会（第1日目）についての経過報告もおこなわれました。

### (3) 編集委員会報告

川野英二編集委員長より、2024～2025年度の編集委員会についての活動報告がありました。年報43号には自由投稿論文5本の投稿があり、2本が掲載に至ったことが報告されました。年報43号の119頁に記載されている論文タイトルの誤植についての報告と訂正がありました。

### (4) 国際交流委員会報告

妻木進吾国際交流委員会委員長より、2024～2025年度の国際交流委員会についての活動報告がありました。

### (5) 新入会員紹介

三田泰雅事務局担当理事より、2024年10月～2025年9月に理事会にて承認された、15名の新入会員の紹介がおこなわれました。

## 6. 第14回日本都市社会学会賞（磯村記念賞）選考委員会報告

内田龍史選考委員長（妻木進吾会員代読）より選考課程および結果の報告がありました。第1回の委員会で著書4件を候補作に選定し、第2回の委員会で林真人会員の下記の著書を受賞作と決定しました。

Mahito Hayashi, 2023, *Rescaling Urban Poverty: Homelessness, State Restructuring and City Politics in Japan*, Wiley.

浅川達人会長より受賞者に表彰状と記念品が授与されました。引き続き受賞者の挨拶がありました。

## 7. 審議事項

### (1) 若手会員支援事業について

理事会（浅川達人会長）より、若手研究者支援事業として「グループへの助成金の支給」の提案がありました。事業内容については、以下のとおりの説明がありました。

- ・グループに対して一時金を譲渡し、年度末に信憑書類と残金を戻してもらう。
- ・若手研究者15名程度を1グループとして、毎年新規の2グループまでに対して20万円を助成金として渡す。

総会出席者からの質疑等はなく、理事会提案（原案）が承認されました。今後の理事会にて、事業の詳細について検討していくことになりました。

## (2) 学会規約・役員選出規約の改正について

理事会（三田泰雅事務局担当理事）より、学会規約・役員選出規約の改正（規約の統合）の提案がありました。役員の被選挙権に関する規則が複数の規約にまたがっており、役員選出規程に未記載のものもあるため統合するという、改正の主旨が説明されました。総会出席者からの質疑等はなく、理事会提案（原案）が承認されました。

## (3) 2024 年度決算および監査報告

三田泰雅事務局担当理事より、2024 年度決算について説明されました。次いで横田尚俊監事より決算の監査結果について適正であったとの説明がありました。総会出席者からの質疑等はなく、原案どおり承認されました。

## (4) 2025 年度予算

三田泰雅事務局担当理事より、2025 年度予算案について説明がありました。総会出席者からの質疑等はなく、原案どおり承認されました。

## 8. 次年度大会について

浅川達人会長より 2026 年度第 44 回大会について、日本大学文理学部にて開催するとの報告がありました。

## 9. 次年度開催校挨拶

開催校の松橋達矢会員より挨拶がありました。会場および日程については現在調整中であるとの報告がありました。

## 10. 役員選挙 開票と結果報告

高木竜輔選挙管理委員長より、以下のとおり選挙結果が報告されました（敬称略）。

会長（1名）：高木恒一 14 票（次点 山口恵子 7 票）

全国理事（4名）：山口恵子 15 票・五十嵐泰正 13 票・山本薫子 10 票・中澤秀雄 8 票

（次点 浦野正樹 8 票／丸山真央 8 票／川野英二 8 票） ※くじ引きによる（下記参照）。

地方区理事（各地区 1 名）

東日本：小山弘美 13 票（次点 平井太郎 12 票）

東京都：浦野正樹 10 票（次点 中澤秀雄 9 票）

中部・近畿：丸山真央 11 票（次点 川野英二 10 票・松宮朝 10 票）

中国・四国・九州・海外：堤圭史郎 18 票（次点 伊藤泰郎 12 票）

監事（2 名）：有末賢 6 票・早川洋行 5 票（次点 和田清美 4 票／稲月正 4 票）

なお、選挙管理委員会から、全国区理事で 4 名が同点となったため、役員選出規程 5 条によつてくじ引きを行い、上記会員が当選したことが報告されました。

## 11. 閉会の辞（松宮朝常任理事）

（事務局担当理事 伊藤泰郎）

# 2024 年度決算報告および 2025 年度予算案

日本都市社会学会  
2024年度 決算報告 (2024年8月1日～2025年7月31日)

## 【一般会計】

収入				支出			
項目	予算	決算	備考	項目	予算	決算	備考
入会金	20,000	22,000	11名	消耗品費	10,000	2,224	ラベルシール等
学会費	1,530,000	1,604,800	26年度：一般1名学生0名 25年度：一般58名学生13名 24年度：一般97名学生15名 23年度：一般12名学生3名 22年度：一般1名学生2名 21年度：一般0名学生2名 SMOOSY：一般87名学生7名終身会員1名入会金1名	通信費	30,000	2,380	宅配便送料、郵便代。
広告収入	10,000	0		事務局業務委託費(学会ニュース、SMOOSY等)	550,000	1,015,915	ニュース128～130号(300部)55315、SMOOSY管理費462000
雑収入	90,000	144,591	複写権使用料等(4971、立教大学(大会開催費返金80000)、事務局費返金20)	年報印刷費	480,000	470,800	第42号(400部)。
年報販売	60,000	57,600	販売委託分(1200円)×48冊	大会開催費	200,000	450,000	第42回大会(立教大学)、第43回大会(鶴山学園大学)
				役員・委員会費	40,000	0	Zoom開催により発生せず
				事務局費	130,000	188,837	人件費、事務局幹事費、HP管理費、カード手数料、振込手数料など
				学会賞費	10,000	8,987	賞状、副賞
				企画委員会費	150,000	144,654	非会員謝金、交通費等
				編集委員会事務局費	50,000	8,808	編集関係通信費、J-stage登録料
				国際交流費	100,000	0	
				社会学系コンソーシアム年会費	0	10,000	2025年度分
				慶弔費	20,000	0	
				被災会員への会費減額	22,500	0	
				学会費返金	0	19,500	一般会員3件(払込重複の返金)
単年度収入計	1,710,000	1,829,391		単年度支出計	1,792,500	2,322,077	
前年度繰越金	5,417,151	5,417,151		予備費	5,334,651	4,924,465	次年度繰越金
計	7,127,151	7,246,542		計	7,127,151	7,246,542	

## 【特別会計】

収入				支出			
項目	予算	決算	備考	項目	予算	決算	備考
今年度繰入金	0	0		将来構想基金	400,000	0	執行なし
前年度繰越金	2,800,000	2,800,000		予備費	2,400,000	2,800,000	次年度繰越金
計	2,800,000	2,800,000		計	2,800,000	2,800,000	

## 【合計】

収入 計	10,046,542			支出 計	10,046,542		
------	------------	--	--	------	------------	--	--

監査の結果、関係書類並びに会計処理は適正であり、2024年度決算に相違がないことを認めます。

日本都市社会学会

2025年 8月22日

監事

横田尚俊

2025年 9月1日

監事

矢部拓也

日本都市社会学会  
2025年度 予算案 (2025年8月1日～2026年7月31日)

## 【一般会計】

収入			支出		
項目	予算	備考	項目	予算	備考
入会金	20,000	10名	消耗品費	10,000	文房具等
学会費	1,548,400	一般240名、学生40名 納入率9割で計算	通信費	30,000	郵便代、宅配便送料など。
広告収入	0	年報掲載広告	事務局業務委託費	892,000	会員管理(SMOOSY)462,000 カード支払基本料・手数料等100,000 毎日学術フォーラム(131,132号)330,000
雑収入	100,000	複写権使用料等	年報印刷費	480,000	第44号(400部)
年報販売	60,000	販売委託分(1,200円)×50冊分	大会開催費	250,000	第44回大会(日本大学)
			役員・委員会費	40,000	役員・委員旅費補助
			事務局費	150,000	アルバイト代、振込手数料など
			学会賞費	30,000	学会賞賞状・副賞等
			企画委員会費	150,000	非会員謝金など
			編集委員会事務局費	50,000	J-stage作業代、英文校閲費等
			国際交流費	567,800	日韓セッション謝金等40000 宿泊費補助52800、レセプション補助25000 2026年度韓国地域社会学会派遣費用450,000
			社会学系コンソーシアム年会費	10,000	2026年度分
			慶弔費	20,000	
			被災会員への会費減額	22,500	一般5、学生5
			若手会員支援事業	400,000	2組
小計	1,728,400		小計	3,102,300	
前年度繰越金	4,967,013		予備費	3,593,113	
計	6,695,413		計	6,695,413	

## 【特別会計】

収入			支出		
項目	予算	備考	項目	予算	備考
今年度繰入金	0		将来構想基金	400,000	
前年度繰越金	2,800,000		予備費	2,400,000	
計	2,800,000		計	2,800,000	

## 【合計】

収入	9,495,413		支出	9,495,413	
----	-----------	--	----	-----------	--

## 第14回日本都市社会学会賞(磯村記念賞)作品と選考理由

2025年度学会賞選考委員会(以下、委員会)は、学会規約第2条第3項ならびに学会賞(磯村記念賞)内規の定めるところにより、第14回日本都市社会学会賞(磯村記念賞)の選考を行った。以下、選考経過、選考結果、選考理由について報告する。

## 1. 選考経過

2025年7月20日に開催した第一回委員会（オンライン）において、学会賞内規第6条（選考の方法）で定める(1)会員の自薦・他薦、(2)推薦委員による推薦、(3)学会事務局が会員を対象に行う文献調査によって作成された著作一覧をもとに、2023年1月から2024年12月末までに公刊された以下の著書4件（刊行順）を審査の対象とした。

- ・ Mahito Hayashi, *Rescaling Urban Poverty: Homelessness, State Restructuring and City Politics in Japan*, Wiley, 2023年11月14日
- ・ 武田尚子『市場都市イギリス・ヨークの近現代——市場再編と貧困地域』東信堂、2024年1月23日
- ・ 高畑幸『在日フィリピン人社会——1980～2020年代の結婚移民と日系人』名古屋大学出版会、2024年5月2日
- ・ 山本薫子『立ち退かされるのは誰か？——ジェントリフィケーションと脅かされるコミュニティ』慶應義塾大学出版会、2024年12月17日

選考委員は、全員がこの4著作に目を通して比較考量し、内規第7条（選考の基準）を拠り所にして評点を与え（5段階評価）、そのように評価した理由をコメントした審査票を作成し委員長に送付した。2025年8月20日に開催した第二回委員会（オンライン）で、全委員の審査票を集約して作成した一覧表をもとに慎重に審議した結果、受賞作を決定した。

## 2. 選考結果（受賞作）

- ・ Mahito Hayashi, *Rescaling Urban Poverty: Homelessness, State Restructuring and City Politics in Japan*, Wiley, 2023年11月14日

## 3. 選考理由

林真人会員の著作『*Rescaling Urban Poverty: Homelessness, State Restructuring and City Politics in Japan*』は、都市社会学における理論的・実証的研究の双方において顕著な成果を示すものである。本書は、著者が長年にわたり横浜・寿町等において実施してきた、ホームレスの生活実態、支援活動、自治体施策に関する綿密な資料分析と参与観察を基礎としている。その上で、リスケーリング論という政治経済学的枠組みを援用し、国家—公共空間・私的空間—都市社会運動という三つの経路を通じてホームレス排除のメカニズムを析出している。著者自ら「Regulationist Ethnography」と称する方法論によって、理論的検討と民族誌的記述を往還させつつ都市貧困の現実を解明するものである。

本書の意義は第一に、理論的貢献にある。欧米都市を前提に構築されてきたリスケーリング論を日本の都市文脈に適用することにより、比較都市研究の新たな展開を拓いている。国家と都市、公共と私的空間、市民運動といった多層的なスケールの交錯を対象化することによって、地域研究を超えた国際的な理論的射程を提示している。

第二に、実証的研究としても優れた成果を示す。例えば、空き缶リサイクルの経済活動をサブシステムから商品化への移行としてとらえ、各自治体における犯罪化の過程、当事者や活動家の戦略的対応、さらには自治体政策の矛盾を詳細に描き出した章は、都市貧困研究における新たな知見を提供するものである。こうした現場の精緻な観察と政策的文脈との接合は、都市社会学における実証研究の一つの到達点といえる。

第三に、国際的発信の側面である。本書は、2014年に日本語で公刊された成果を基盤としつつ、理論的・方法的円熟を加えて英語単著として出版されたものである。それは、日本のホームレス研究および都市社会学の成果を海外に伝達することと並んで、欧米における理論的蓄積と日本の実証研究との検討を通じて新たな理論的展開を志向しており、日本の都市社会学の国際化・学際化に資する顕著な貢献といえる。

以上のように、本書は、日本のホームレス研究および都市貧困研究を基盤としつつ、理論的独創性、実証、国際的発信という三要素を高次元で結合した学術的成果である。長期にわたるフィールドワークに裏打ちされた民族誌的記述と政治経済学的分析の接合、都市社会運動に関する緻密な考察、さらには比較都市研究への展望の提示は、日本都市社会学の理論的・実証的發展に大きく寄与するものである。以上の理由により、本書を磯村記念賞の授賞にふさわしいと判断した。

なお、他の候補作もそれぞれが自身のフィールドにおける長年にわたる研究の集大成と言える成果であり、委員による評点の合計においても受賞作と顕著な差があったわけではない。いずれも磯村英一の名を冠する本学会賞の候補作としてふさわしい研究業績であったことを付言しておく。

(学会賞選考委員長 内田龍史)

## ※前期（2023～2024 年度）学会賞選考委員・推薦委員

本来であれば、昨年度の学会ニュース 129 号に掲載すべきところ、事務局のミスにより掲載できておりませんでした。遅ればせながら掲載いたします。深くお詫び申し上げます。

【学会賞選考委員】西田芳正（選考委員長）、高木竜輔（担当理事）、北川由紀彦、高野和良、高畑幸、妻木進吾、中澤秀雄、速水聖子、堀川三郎

【学会賞推薦委員】五十嵐泰正、小山雄一郎、高久聡司、武岡暢、武田尚子、林浩一郎、原田謙、松尾浩一郎、松橋達矢、丸山里美、三田知実、三田泰雅、文貞實、安河内恵子、吉田舞

（前事務局担当理事 三田泰雅）

## 理事会報告

### (1) 2024-2025 年度第 4 回理事会報告

2024-2025 年度第 4 回理事会は、2025 年 9 月 8 日（月）に愛知県立大学サテライト（ウインクあいち）にて開催され、各種委員会報告の後、次年度予算案、次回理事会への引き継ぎ事項等について検討されました。

### (2) 2025-2026 年度第 1 回理事会報告

役員改選を受けての 2025～2026 年度第 1 回理事会は、例年は総会終了後に大会会場にて開催されていましたが、新任の理事が揃わなかったことから、2025 年 10 月 4 日（土）に Zoom にて開催されました。理事の役割等が審議されるとともに、前期理事会からの引き継ぎ事項の確認や今期理事会の取り組みなどについて議論されました。理事の役割については下記をご参照ください。

（事務局担当理事 伊藤泰郎）

## 2025～2026 年度理事・各種委員会構成

2025～26 年度の理事および各種委員会の構成は以下の通りです（敬称略）。

常任理事：浦野正樹、山口恵子

【企画委員会】委員長：山本薫子（理事）、副委員長：丸山真央（理事）、委員：岩館豊、川本綾、笹島秀晃、佐藤裕、中川雄大、仁井田典子、林凌、平井太郎、八木寛之、結城翼、吉田舞

【編集委員会】委員長：堤圭史郎（理事）、副委員長：五十嵐泰正（理事）、委員：小山弘美（理事）、赤枝尚樹、川野英二、金善美、徳田剛、林浩一郎、三田知実、陸麗君

【国際交流委員会】委員長：中澤秀雄（理事）、担当理事：山口恵子、委員：金希相、申恵媛、山本かほり

【学会賞選考委員会】委員長：内田龍史

【社会学系コンソーシアム】高木恒一、担当理事：伊藤泰郎

（事務局担当理事 伊藤泰郎）

## 企画委員会報告

10 月 27 日に第 1 回委員会をオンライン（zoom）で開催し、今後 2 年間の大会企画の方針について協議しました。次回大会では、シンポジウム、テーマ部会、ラウンドテーブルを開催する予定です。詳しくは次回学会ニュースでお知らせいたします。

（企画委員長 山本薫子）

## 編集委員会報告

### 『日本都市社会学会年報』第44号自由投稿論文・研究ノート募集

編集委員会では、『日本都市社会学会年報』第44号(2026年9月発行予定)に掲載する「自由投稿論文」「研究ノート」「書評リプライ」の原稿を募集します。会員諸氏の、奮っての投稿をお待ちしています。

投稿を希望される方は、本会ウェブページ(<https://urbansocio.smoosy.atlas.jp/ja/journal>)に掲載されている投稿規定および執筆要項を遵守した原稿を作成のうえ、2025年11月30日までに、原稿のwordファイルおよびPDFファイルの2点を添付して、下記の編集委員会事務局および学会事務局宛にメール送信してください。

送付先※(@を半角にしてください)

日本都市社会学会編集委員会事務局 [tsutsumi@fukuoka-pu.ac.jp](mailto:tsutsumi@fukuoka-pu.ac.jp)

日本都市社会学会事務局 [urbansociojp@gmail.com](mailto:urbansociojp@gmail.com)

投稿資格のないもの、投稿期限を過ぎたものは一切受け付けられませんので、くれぐれもご注意ください。

(編集委員長 堤圭史郎)

### 『日本都市社会学会年報』43号に関する訂正とお詫び

年報43号に掲載しました「第10回日本都市社会学会若手奨励賞受賞の言葉」(119~120頁)で、金希相先生の論文タイトルに間違いがありました。

正しくは以下のとおりです。

「大都市圏における移民の住宅市場への編入過程に関する研究」(『日本都市社会学会年報』40, pp.93-108)

訂正してお詫び申し上げます。

(前編集委員長 川野英二)

## 国際交流委員会報告

本年9月より、日韓交流の重責を担われてきた顔ぶれに新委員も加わり、新任期の国際交流委員会が発足しました。どうぞよろしくお願いたします。来年2026年は韓国地域社会学会に日本都市社会学会より報告者を派遣する予定となっております。ここまで継続してきた交流に遺漏のないよう努めて参ります。

(国際交流委員長 中澤秀雄)

## 若手研究者支援事業：「グループへの助成金の支給」

2025年総会で、新規事業「若手研究者支援事業：「グループへの助成金の支給」」を開始することが決定しました。詳しくは以下の通りですので、奮ってご応募ください。

### (1) 支援事業の概要

若手研究者を中心とするグループに対して助成金を支援する。助成期間は1年とするが、連続3年間までの再申請を認める。

## (2) 助成対象と審査

- 1) 「若手」研究者5名程度を1グループとして、毎年新規の2グループまでに対して20万円を助成金として支給する。「若手」は博士(後期)課程入学後10年以内の研究歴のものとする。なお、ひとりのメンバーが複数のグループに所属することは原則として認めない。
- 2) グループの構成メンバーは全員が日本都市社会学会会員であることとする。ただし「若手」は3名以上参加していれば可とする(メンターがメンバーに加わることを排除しない)。なお2025年度の支援対象者は、2025年度4月末日現在で会員資格を持つ会員のうち、年会費の滞納がない者とする。
- 3) 助成を希望するグループは期日までに申請書を学会事務局に提出する。採否は理事会で審査する。

## (3) 助成金の運用

- 1) 助成開始の段階で、助成金を一括してグループに支給する。各研究グループは会計担当者を決めて会計管理し、年度末に信憑書類を提出する。年度末に資金の余剰が出た場合には学会に返納する。
- 2) 会計年度は単年度とし、年度末に会計報告を行う。学会監事による監査を実施する。

## (4) 報告義務など

- 1) 支給を受けた研究グループは、支給を受けた翌年度のニューズレターまたは『日本都市社会学会年報』において「研究活動報告」を行う。なお、『日本都市社会学会年報』以外の専門誌に投稿した場合、本支援事業の支給を受けたことをクレジットしていれば、その投稿で代替することができる。また連続3年間の支給を受けた場合は、その翌年度の11月締切の『日本都市社会学会年報』に論文を投稿することとする。投稿は、グループメンバーの単著または共著を問わない。
- 2) 金銭管理が不適切であったり、報告義務が果たされなかったりした場合は、助成の取り消しまたは当面の受給資格の停止の措置を行う。

## (5) 応募方法と締切

応募用紙を用いて応募書類を作成し、学会事務局にメールで提出すること。応募締切は2026年1月31日。なお、応募用紙は学会ホームページよりダウンロードできる。

(会長 高木恒一)

## 第11回日本都市社会学会若手奨励賞候補の文献調査および推薦に関するお願い

「日本都市社会学会若手奨励賞内規」にもとづき、文献調査を行います。あわせて自薦・他薦の応募を受け付けます。若手奨励賞は「著書の部」と「論文の部」に分け、それぞれについて選考を行います。多くの方々からの応募をお待ちしています。

**受賞対象及び資格者**：今回、対象となるのは、(1)2024年1月1日～2025年12月末日の2年間に発表された単著書(著書の部)と論文(論文の部)です。なお、2016年9月の総会で、若手奨励賞「論文の部」の受賞対象が、「原則として『日本都市社会学会年報』に掲載された単著論文とする。ただし、『日本都市社会学会年報』以外に発表された単著論文に関して、会員および推薦委員から推薦があった場合には対象に含める」と改定されております(内規3)。

(2)有資格者は共に、公刊時点で博士(後期)課程入学後10年以内であった日本都市社会学会会員です。

**文献調査**：上記の基準を満たす著書を発表した会員は、2026年1月末日までにオンライン上のフォーム(次ページのQRコード・学会HPトップページ・次ページのURLからアクセス)よりお申し込みください。この情報は、選考対象の母集団を構成するものですので、条件を満たすすべての研究業績についてご記入下さい。

自薦・他薦：上記の基準を満たす著書のうち、同賞にふさわしい「都市社会学に関する、将来性に富み、奨励に値する、優れた研究業績」（内規1）をご推薦下さい。会員であれば、だれでも推薦者となることができます。自薦も歓迎します。2026年1月末日までにオンライン上のフォーム（右QRコード・学会HPトップページ・下記のURLからアクセス）よりお申し込みください。 <https://forms.gle/MUks9TDswebXQ1hG8>



宛先・問い合わせ先：この件についてのお問い合わせは、学会事務局までe-mailでお願いいたします。学会事務局の連絡先は、本ニュース1頁目にあります。選考対象のリスト作成は、会員自身による文献調査報告や自薦がまずは基本となります。該当される方は、ぜひとも積極的に対応下さい。

その他：第11回都日本都市社会学学会若手奨励賞の選考結果については、2026年度の学会大会時に発表します。

（事務局担当理事 伊藤泰郎）

## 「第12回震災問題研究交流会」開催と自由報告募集のお知らせ

『災害と社会』研究ネットワーク代表 大矢根淳  
日本社会学会 防災学術連携体担当（連携委員）  
浦野正樹・浅川達人

### 1. 代表からのご挨拶

震災問題研究交流会は、東日本震災（2011年）をきっかけにして企画・創設されたものです。震災の発?直後から?本社会学会の研究活動委員会を中心にして研究者同士の被災現場の調査研究状況などを共有するために震災情報連絡会が設けられ、それを基盤にして第1回の研究交流会が開催されました。その研究交流会はその後の災害発生状況を鑑みてテーマを拡大しながら、毎年続けられてきました。現在では、日本社会学会内に置かれている防災学術連携体担当（連携委員）と、社会的視点に基づいた災害研究をめざす研究集団＜『災害と社会』研究ネットワーク＞（旧来の「震災問題研究ネットワーク」から名称変更）との連携というかたちで開催しております。

近年では、世界中で猛威をふるったコロナ禍から、ロシアのウクライナ侵略、イスラエルのパレスチナ侵攻など、世界的に不安定で先行きが不透明な国際状況が継続しています。日本では一昨年元旦に発生した能登半島地震（そして豪雨災害の多重被災）や夏場を挟んで全国各地で台風や集中豪雨などの風水害や土石流災害が頻発しています。

本研究交流会では、これまで、東日本大震災に限らず、こうした昨今の甚大な災害・惨禍を対象として、幅広く研究交流を行ってきました。今年度も、災害・惨禍事象全般に関する報告を受け付けますので、是非下記の要領に従って、一般報告の申し込みをお願いいたします。この交流会では、発表者だけでなく、参加して一緒に議論していただける方、社会学者と一緒に議論してみたい他分野の研究者、行政担当者、マスコミ関係者、災害研究に関心をお持ちの方にも参加していただいております。

### 2. 交流会の開催日程と形式

今年度は、2026年3月20日（金）、21日（土）両日で、会場（早稲田大学の予定）での対面開催を主とし、一部Zoomによる遠隔リアルタイム方式も用いたハイブリッド形式の研究会として開催する予定です。

本交流会では、研究発表を募集して最新の研究動向を共有する時間を確保するとともに、若手研究者の提案に基づく企画をプログラムに盛り込むなどして、今後の災害研究の展開に関連する議論の時間となるべく確保するため2日間の日程としております。

### 3. 交流会への参加申し込み方法と締め切り

参加の申し込みおよび報告の申し込みについては、下記のリンク先のフォームに、必要な情報をご入力の上お申し込みください。

(1) 参加して、報告を希望する方

「報告申込用フォーム」と「参加申込フォーム」の両方にご記入ください。

(2) 参加のみで、報告は希望されない方

「参加申込フォーム」のみご記入ください。

報告申込用フォーム：<https://forms.gle/rWUM3nziBYWztr4x7>

参加申込用フォーム：<https://forms.gle/qVSQfWENKBL7dH3L6>

締め切りは以下の通りです。

報告申し込み 締め切り：2026年1月30日（金）

参加申し込み 締め切り：2026年3月13日（金）

お申込みされた方にはオンライン参加の際に必要な Zoom 情報等をお知らせいたします。

お問い合わせ先：震災問題研究交流会事務局（[office150315dcworkshop@gmail.com](mailto:office150315dcworkshop@gmail.com)）

#### 4. 昨年までの研究交流会プログラムなどの情報や交流会報告書

昨年までの研究交流会プログラムなどの情報や交流会報告書については、次のリンク先からご覧いただけます。

<https://greatearthquakeresearchnet.jimdo.com/>

## 会員異動

### 新入会員

（2025年9月8日理事会承認）

<中部・近畿地区>

志田倫子（静岡英和学院大学）

下川詩乃（関西学院大学大学院）

大川内晋（神戸大学）

松端祐介（京都大学大学院）

### 退会

（2025年9月8日理事会において、下記年度での退会を承認）

小林聡（2025年度） 浅川賢司（2024年度）

### 会員資格の喪失

丸山里美 森幸雄

（事務局担当理事 伊藤泰郎）

## 学会事務局からのお知らせ

### ◆ 2025 年度 会費納入のお願い

年会費は一般会員が 6,500 円、大学院生会員が 4,000 円、学部生会員が 2000 円となっております。2025 年度（2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日）の会費をまだお支払いいただいていない会員の皆様、できるだけ早めの納入をお願いいたします。年会費は SMOOSY にてクレジットカードでお支払いいただくか、郵便振替でご納入いただけます。郵便振替はオンライン入金もできます。ゆうちょダイレクトの QR コードをご活用ください。



振替口座：00140-4-703976 日本都市社会学会

ゆうちょダイレクトログイン：

[https://direct.jpbank.japanpost.jp/tp1web/U010101WAK.do?link\\_id=ycDctLgn](https://direct.jpbank.japanpost.jp/tp1web/U010101WAK.do?link_id=ycDctLgn)

2024 年度までの学会費をまだ納入されていない会員の皆様は、お早めに納入くださいますようお願い申し上げます。極力、全額の納入をお願いいたしますが、単年度分の振込につきましてもお受けいたしますので、是非とも納入くださいますようお願い申し上げます。継続して 3 年以上会費を滞納した場合、原則として会員の資格を失うこととなりますので（学会規約 13 条）、その旨ご留意ください。

本学会が利用しておりますゆうちょ銀行は、全国の金融機関（一部を除く）との相互振込が可能です。他の金融機関から本学会の口座に振り込む場合は、以下の店名・預金種類・口座番号・受取人名をご指定ください。

銀行名	ゆうちょ銀行
預金種類	当座
金融機関コード	9900
口座番号	0703976
店番	019
受取人名	ニホントシシャカイガツカイ
店名 (カナ)	〇一九 (ゼロイチキュウ店)

### ◆学会ホームページの移転およびメールアドレスの変更

1 ページ目にも記載していますが、2025 年 4 月 1 日より学会ホームページとメールアドレスが変更となっております。

- ・ホームページ <https://urbansocio.smoosy.atlas.jp/ja>
- ・学会メールアドレス [urbansociojp@gmail.com](mailto:urbansociojp@gmail.com)

### ◆ご所属先等変更のお願い

ご所属先やご住所等が変更となられた会員の皆様もおられるかと思えます。2025 年度より会員管理サービス SMOOSY を導入しておりますので、お手数をおかけいたしますが、会員情報の変更をお願いいたします。

### ◆学会ニュースの配信切り替えについて

今号をもちまして学会ニュースの郵送を終了いたします。次号 133 号からはオンライン配信のみとなります。学会ホームページにて公開するほか、SMOOSY ご登録のメールアドレスへ pdf ファイルのリンクをお送りいたします。

## ◆ ごあいさつ

このたび学会事務局が移転し、2025年度から2年間、広島修道大学人文学部社会学科伊藤泰郎研究室にて事務局を担当することになりました。なお、学会ニュース1ページ目に新事務局の連絡先が掲載されていますが、会員の皆様からのお問い合わせやご連絡に関しては、前事務局同様、e-mailにてお願いできましたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

(事務局担当理事 伊藤泰郎)



